県立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

原 中 村 遺 跡

1998. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

例　言

1．本書は，県立医療短期大学建設事業に伴い平成９年度に実施した原中村遺跡の発掘調査の概要である。

2．本調査は，香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化調査センターが調査担当者として実施した。

3．本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は，次のとおりである。

総括		総務		調査	
所　長	大森　忠彦	参　事	別枝　義昭	参　事	近藤　和史
次　長	小野　善範	副主幹	田中　秀文（平成9年6月1日から）	主任文化財専門員	大山　真充
		係　長	前田　和也（平成9年5月31日まで）	主任文化財専門員	藤好　史郎
		主　事	佐々木隆司	文化財専門員	樋本　清輝
				技　師	香西　亮
				調査技術員	糸山　晋

4．調査に際しては，次の機関及び多くの地元の方々に協力を得た。記して謝意を表したい。

（順不同敬称略）

香川県健康福祉部医療短期大学準備室，香川県高松土木事務所，牟礼町福祉課，
地元自治会，地元水利組合

5．本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。

ＳＤ：溝状遺構　　ＳＨ：竪穴住居跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＲ：自然河川跡　　ＳＸ：性格不明遺構
ＳＰ：ピット

6．本書で使用している方向の北は国土座標Ⅳ系の北を用いている。

7．本書の執筆は，調査各担当職員が分担して行い，執筆者名は文末に記した。挿図の作成・浄書については香西・糸山が行い，編集は藤好・樋本が行った。

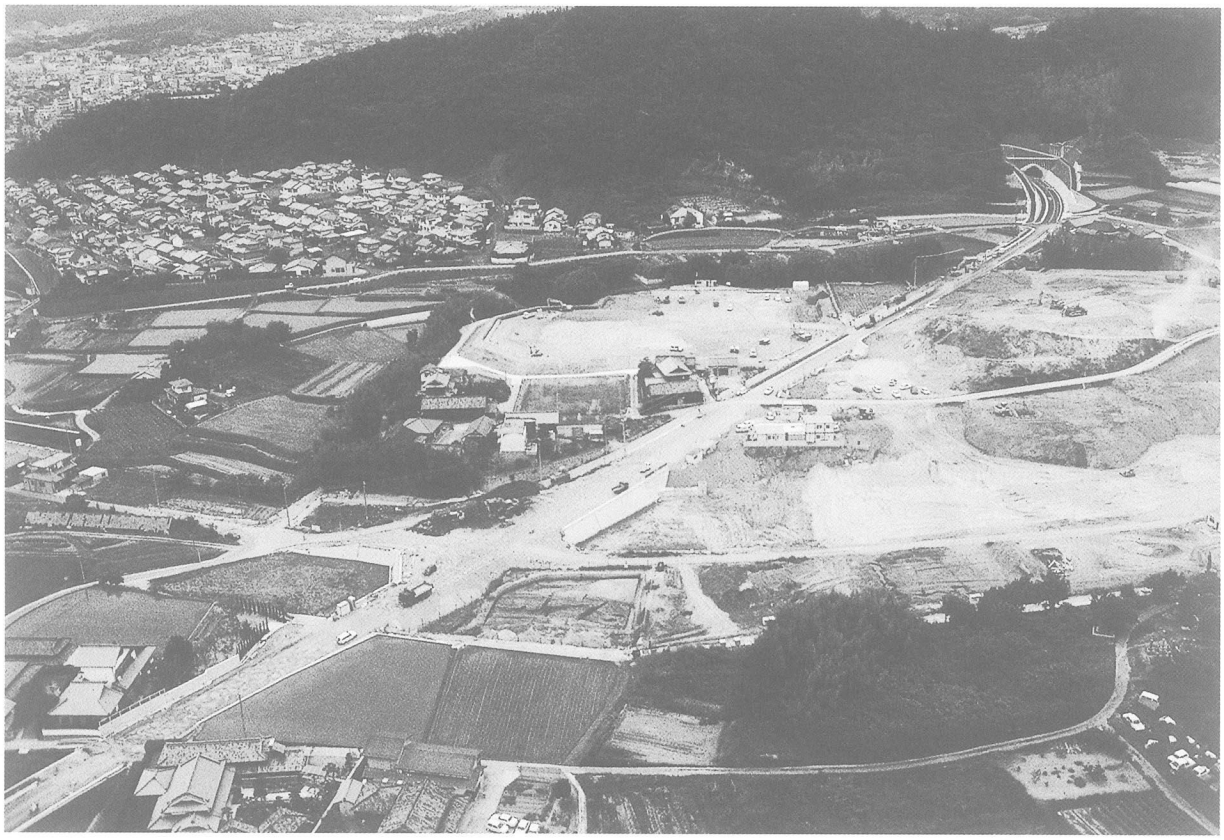


写真１　遺跡全景（西より）

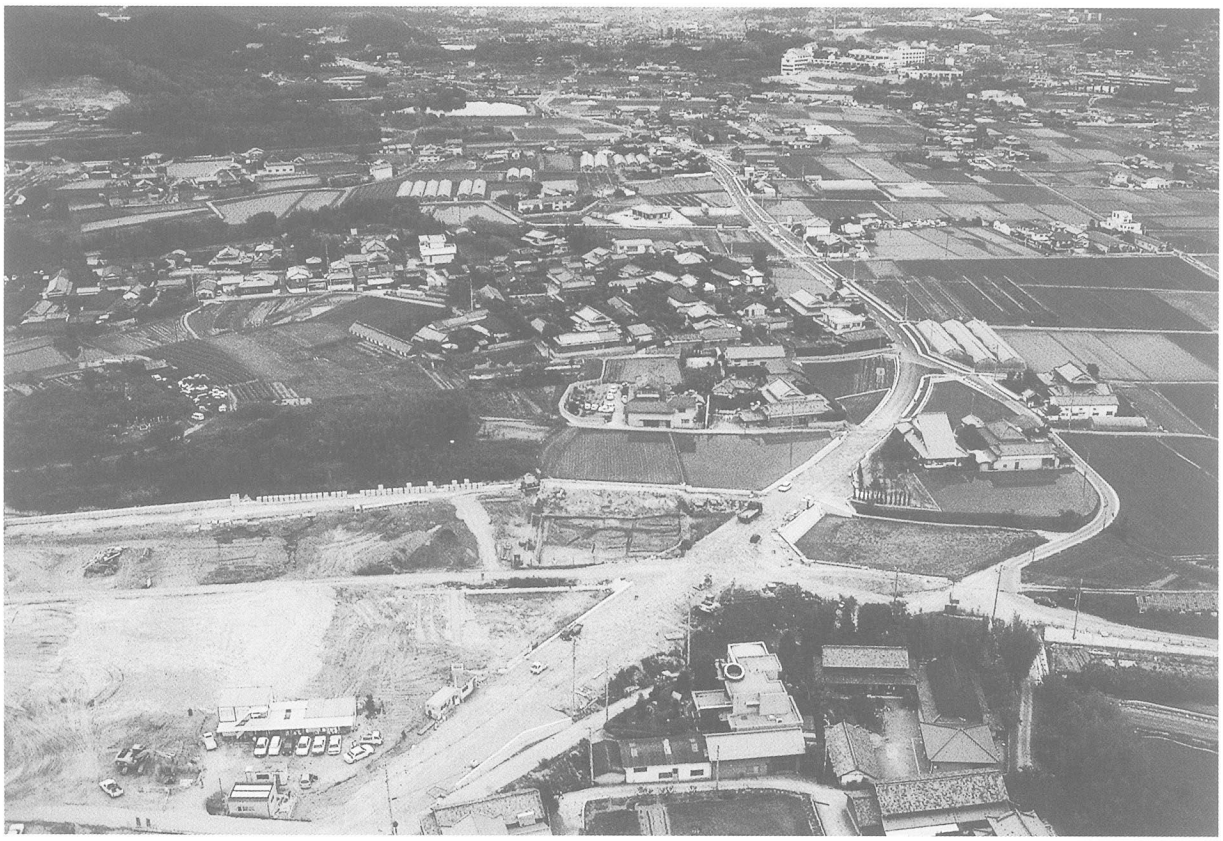


写真２　Ｉ区及び平成８年度県道調査位置遠景（東より）

本　文　目　次

例言
本分目次・挿図目次・写真目次
1．調査の経緯
（1）調査に至る経緯 …… 1
（2）調査の経過 …… 1
2．遺跡の立地と環境 …… 2
3．調査の成果
（1）1区の調査
①調査区の立地 …… 3
②遺構・遺物 …… 3
（2）Ⅱ区の調査
①調査区の立地 …… 5
②遺構・遺物 …… 5
4．まとめ …… 13
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　周辺の遺跡分布図（1／25,000） …… 1
第2図　平成8年度県道部分調査区との位置関係（1／8,000） …… 2
（牟礼町都市計画図より作成）
第3図　Ⅰ区　SR01　全体図（1／200） …… 3
第4図　Ⅰ区　SR01　土層断面図（1／60） …… 4
第5図　Ⅱ区　遺構配置図（1／200） …… 6
第6図　Ⅱ区　SH01　平・断面図（1／60） …… 7
第7図　Ⅱ区　SH05　平・断面図（1／60） …… 9
第8図　Ⅱ区　SH06　平・断面図（1／60） …… 10

写　真　目　次

写真1　遺跡全景（西より）
写真2　Ⅰ区及び平成8年度県道調査位置遠景（東より）
写真3　Ⅰ区　SR01　完掘全景（南より） …… 5
写真4　Ⅰ区　SR01　中～下層　土器出土状況（南東より） …… 5
写真5　Ⅰ区　SR01　中～下層出土　線刻土器（南より） …… 5
写真6　Ⅱ区　全景（北より） …… 6
写真7　Ⅱ区　SH01　完掘全景（西より） …… 7
写真8　Ⅱ区　SH01　土器出土状況（北より） …… 7
写真9　Ⅱ区　SH05　完掘全景（南より） …… 8
写真10　Ⅱ区　SH05　土器出土状況（南より） …… 8
写真11　Ⅱ区　SH06　完掘全景（北より） …… 11
写真12　Ⅱ区　SH06　炭化材検出状況（北東より） …… 11
写真13　Ⅱ区　SH06　北東隅柱穴柱材検出状況（南より） …… 11
写真14　Ⅱ区　SH06　上層土器集中状況（東より） …… 11
写真15　Ⅱ区　SH06　南北土層断面（東より） …… 11
写真16　Ⅱ区　SH06　南東部　上層土器出土状況（東より） …… 12
写真17　Ⅱ区　SH06　南東部　床面直上土器出土状況（東より） …… 12
写真18　Ⅱ区　SH09　土器出土状況（南より） …… 12

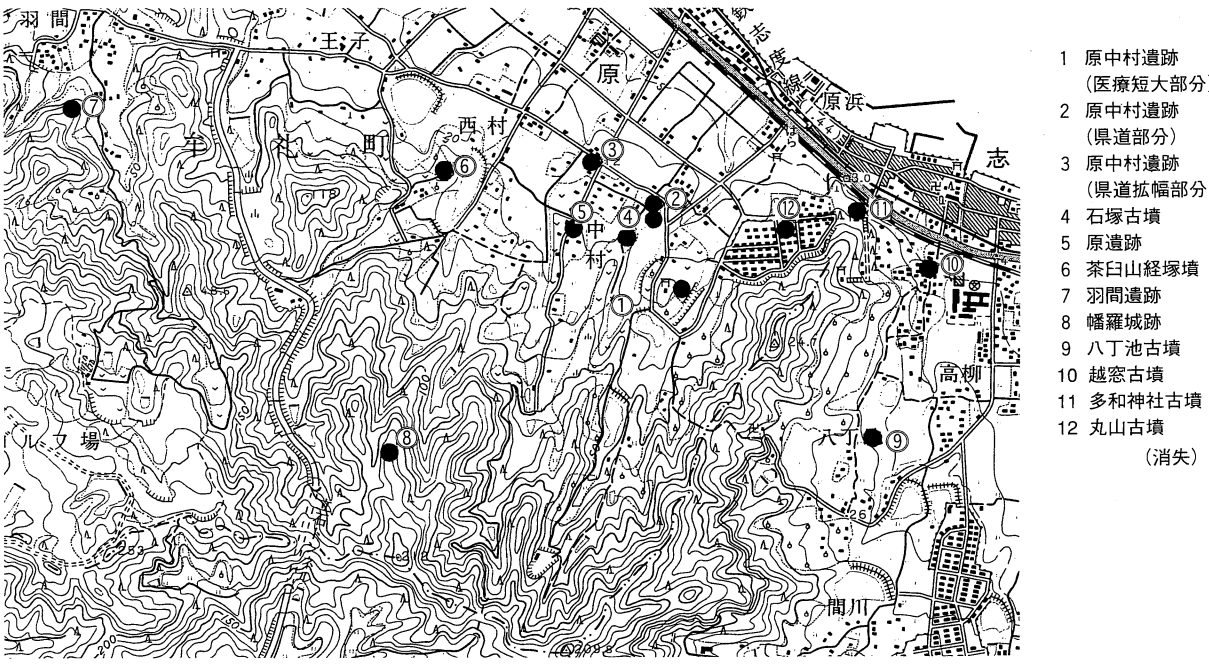
1．調査の経緯

（1）調査に至る経緯

原中村遺跡は，木田郡牟礼町原中村に所在する。平成９年４月１日付けで香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの間で締結した平成９年度「埋蔵文化財調査契約」に基づき，平成９年４月から同年６月までの３ヶ月間で香川県立医療短期大学建設予定地の発掘調査を実施した。発掘調査対象地は前年度に香川県教育委員会文化行政課が実施した試掘調査により確定した2,000㎡である。遺跡名については，前年４月～６月にかけて実施した県道高松志度線の整備にともなって実施した原中村遺跡と今回の西部調査区のＩ区が隣接し，遺跡内容も一連のものであることから，同一の遺跡名となった。調査の実施にあたっては，医療短大建設を所管する香川県健康福祉部医療短大設立準備室および基盤整備を担当する香川県土木部高松土木事務所都市整備課と協議を行い，医療短大用地西部の谷筋部に位置するＩ区から着手し，その後Ⅱ区の調査を実施した。なお発掘調査は，香川県教育委員が調査主体となり，委託を受けた財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者としてセンターの直営方式で実施した。（藤好）

（2）　調査の経過

４月１日から，現場事務所の設営などの調査の準備を開始し，同月14日よりＩ区の表土掘削作業に着手した。５月２日～６日にかけて遺構検出を行い，自然河川跡１条を検出した。同月９日より，自然河川跡の掘削を開始し，同月28日に掘削が終了した。６月４日にＩ区の航空測量を実施し，６月９日～10日にかけて埋め戻しを行い，Ｉ区の調査は終了した。Ⅱ区は，５月15日より表土掘削作業を開始し，５月29日～６月４日かけて遺構検出を行い，竪穴住居跡９棟，溝状遺構３条，土坑，ピットを検出した。６月５日から遺構の掘削を開始し，同月19日に遺構の掘削が終了した。６月24日にⅡ区の航空測量を行った。以後，竪穴住居跡の下部遺構の調査を実施し，残務処理を行い，現地作業を終了した。（樋本）



第１図　周辺の遺跡分布図（1／25,000）

2．遺跡の立地と環境

高松市東部から志度町にかけては，南部の東西方向に延びる山塊が海に迫り，山塊から延びた複数の舌状派生丘陵の間に小規模な平野が形成されている。牟礼町原地区もこうした小平野を中心としたまとまりを有する地区であり，東は志度町との町境に接する。平野の規模は東西約１㎞，南北約0.7㎞ほどの小規模なものであり，その間に小規模な河川が数条走る。今回調査を実施した原中村遺跡は，小平野のやや奥まった箇所に位置する。調査対象地は２カ所に分かれ東部のⅡ区は舌状派生丘陵の標高34.5mの小ピークから北東に延びた稜線上の標高23mほどの緩傾斜部に立地し，平野部越しに瀬戸内海を視認できる。またⅠ区は，Ⅱ区西側の谷筋を挟んだ丘陵東斜面の裾に位置する。丘陵と谷筋の比高差は10mほどあり，谷筋の開析は進んでおり，平野部と丘陵部との隔絶は明瞭である。弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴住居群が展開するⅡ区丘陵の今回の調査対象地外の箇所での県教育委員会の試掘調査では遺構は検出していない。また西に離れたⅠ区は，Ⅱ区とは対岸の別丘陵斜面よりの谷部であり，前年度県道高松志度線関係で実施した原中村遺跡の集落域の縁辺部として理解するべきものである。

第２図　平成８年度県道部分調査区との位置関係（1／8,000）
（牟礼町都市計画図より作成）

原地区においては南の山塊が海に迫り，平野部も狭いこともあり，弥生時代後期末になってもより地形的に安定した丘陵部や微高地部を中心として集落域が展開したものと考えられる。（藤好）

3．調査の成果

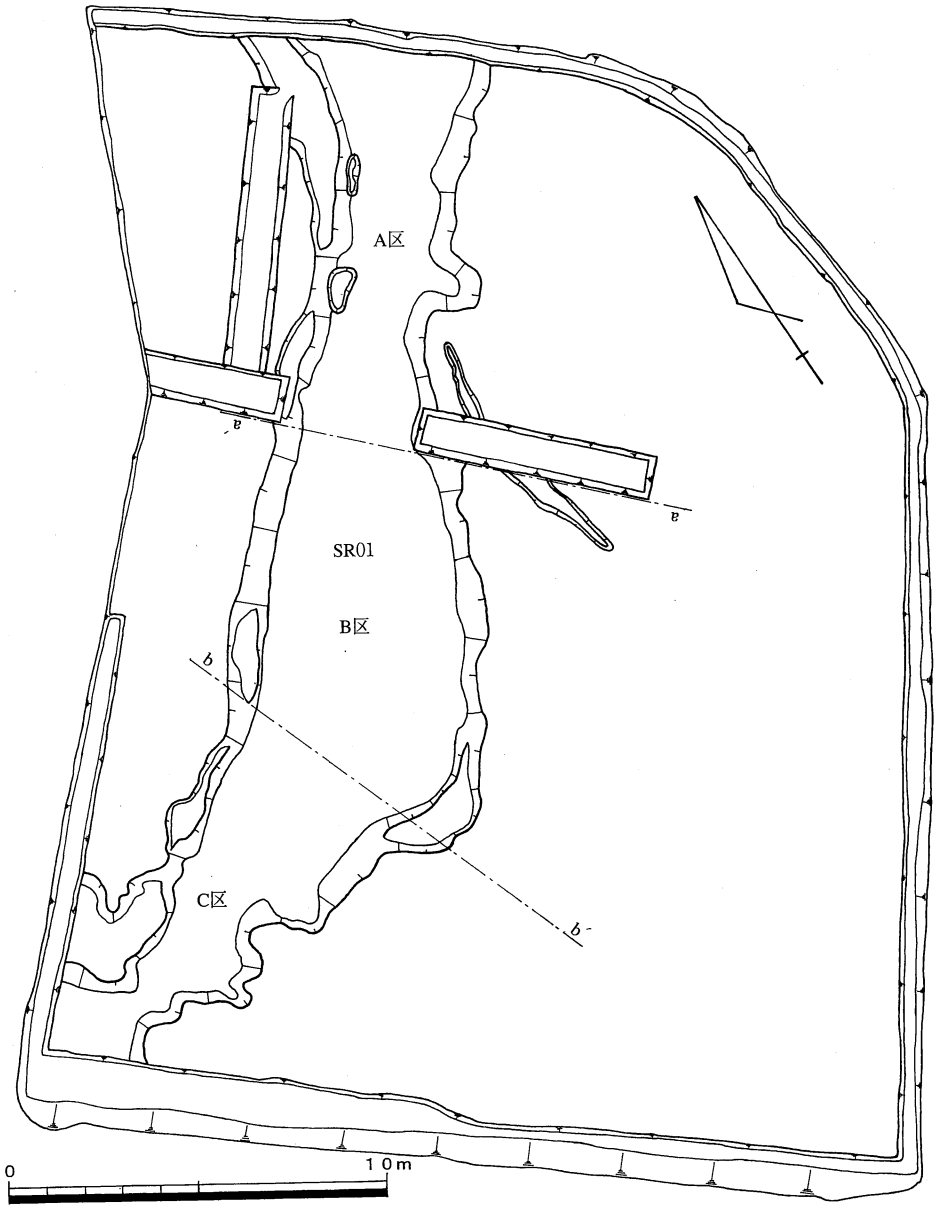
（1）Ⅰ区の調査

① 調査区の立地

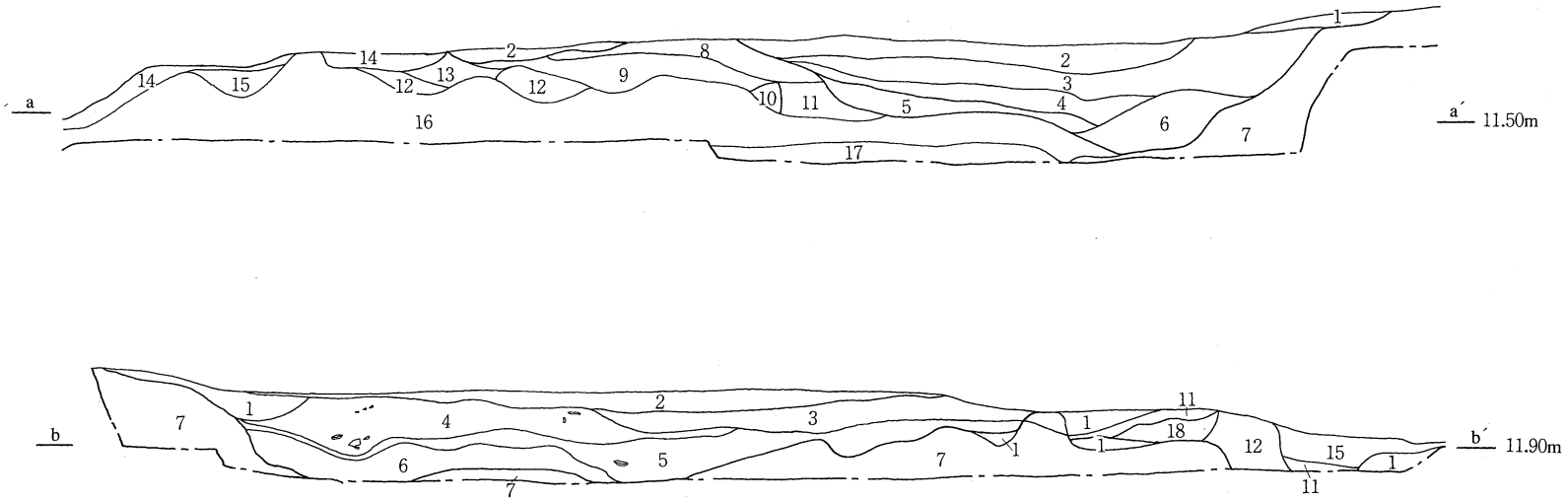
Ⅰ区は，立石山から派生して北へ向かってのびてきた尾根にかこまれた北に開けた谷部の出口部分にあたり，標高は約13m前後である。昨年度，県道高松志度線建設に伴う発掘調査によって調査区のすぐ北部で旧河川跡が検出されている。

② 遺構・遺物

Ⅰ区からは，旧河川跡１本を検出した。これは，昨年度の県道の発掘調査で検出された旧河川跡の上流部分にあたる。



第３図　Ⅰ区SR01　全体図（1／200）



1 赤褐色粗砂
2 黒色粗砂まじりシルト
3 暗青灰色黒色シルトブロックまじり粗砂
4 黄灰色粗砂
5 青灰色黒色シルトブロックまじり細砂
6 黄褐色拳大石まじり粗砂
7 灰白色赤褐色細砂
8 灰白色灰赤色細砂
9 赤褐色灰白色細砂（黒色シルトブロックを含む）
10 赤褐色灰白色細砂
11 灰白色赤褐色細砂
12 灰白色灰赤色細砂（粗砂を多く含む）
13 褐灰色細砂（粗砂を多く含む）
14 灰褐色細砂
15 褐灰色粗砂
16 赤褐色青灰色粗砂
17 黒色粘質土
18 赤灰色シルト質土

第4図　Ⅰ区SR01 土層断面図（1／60）

ＳＲ01

調査区の西隅からやや弧を描くように北東に向かって流れていたと考えられる旧河川跡。規模は，検出長約30m，最大幅約７m，最も深いところで約0.9mであった。埋土は，粗砂を中心とした層で大きく５層に分けることができた。各層より，コンテナ40箱にも及ぶ甕・壺・高坏などの多量の土器片が出土した。また，完形に近い小型の甕，ミニチュア壺型土器やミニチュア甕型土器をはじめとして，線刻を施した小型の甕も出土した。出土した土器の時期は，弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものと考えられる。

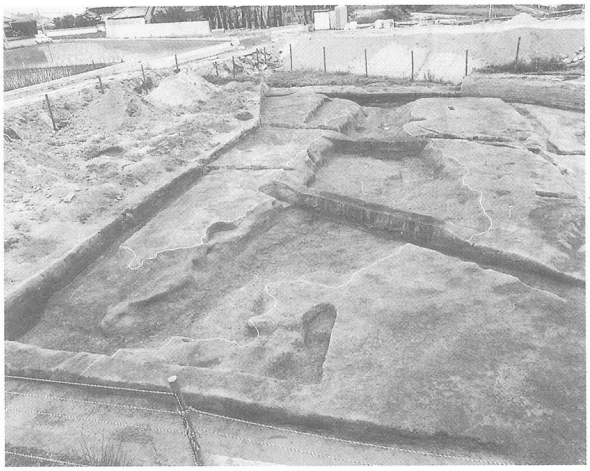


写真３　Ｉ区 SR01 完掘全景（南より）

写真4　Ｉ区 SR01 中～下層土器出土状況（南東より）

（２）Ⅱ区の調査

①　調査区の立地

Ⅱ区は，立石山から派生して北へ向かってきたのびている尾根の西側に広がる緩傾斜部にあたり，標高は約24m前後である。掘削前，調査区は桃畑と竹林になっており，耕作土の下に遺構面となる黄褐色砂質土層が広がっていた。調査区からは，西に五剣山や屋島を眺め，北に志度湾が広がり，眺望に優れている。

②　遺構・遺物

Ⅱ区では，竪穴住居跡９棟，溝跡３条，土坑数個，ピット50あまり検出した。竪穴住居跡は，３棟が他のものより大型で，内１棟は焼失家屋であり，時期的にはいずれも弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。

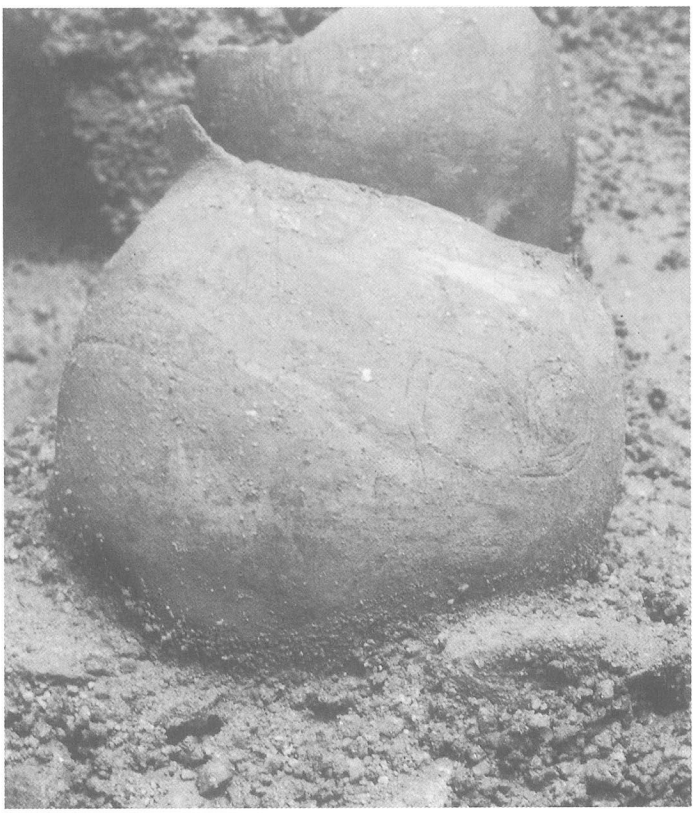
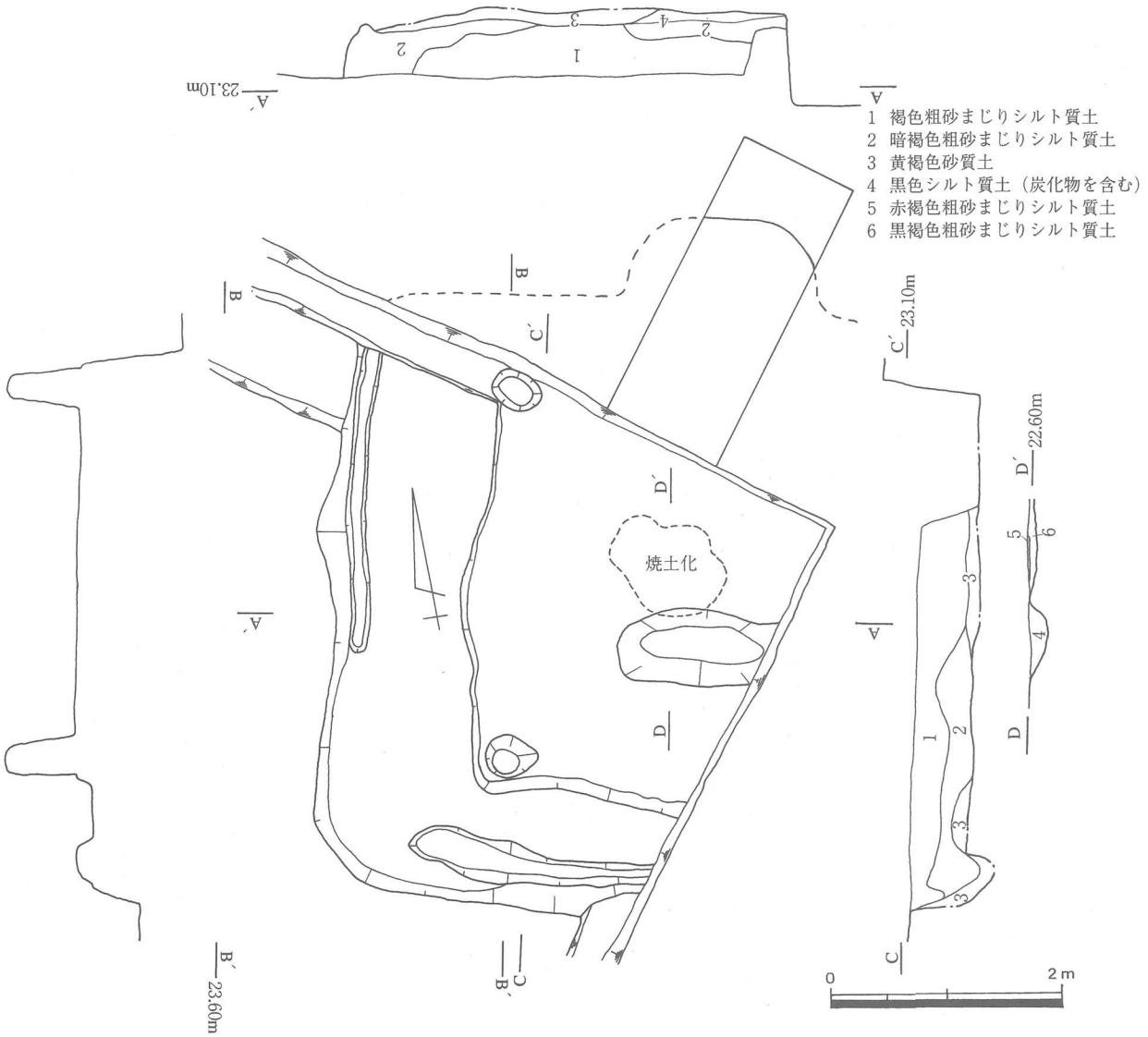


写真５　Ｉ区 SR01 中～下層出土 線刻土器（南より）

写真６　Ⅱ区　全景（北より）

第５図　Ⅱ区　遺構配置図（１／200）



第6図　Ⅱ区 SH01 平・断面図（1／60）

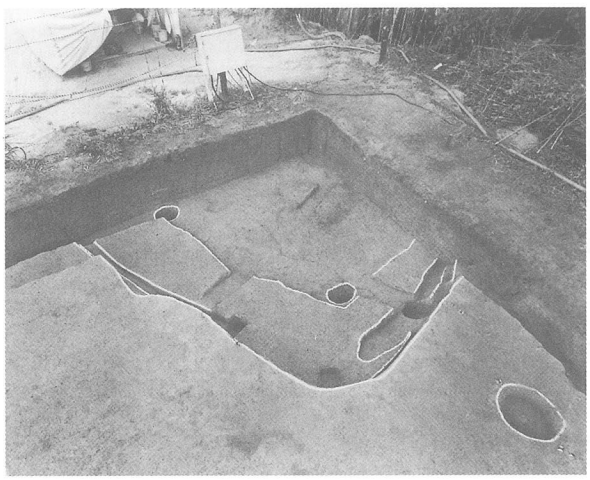


写真7　Ⅱ区 SH01 完掘全景（西より）

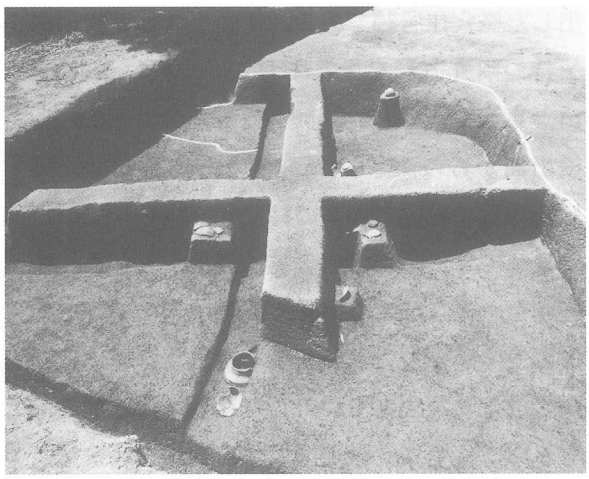


写真8　Ⅱ区 SH01 土器出土状況（北より）

ＳＨ01

調査区の東隅で検出した竪穴住居跡である。東側は池に面した急斜面であるなど，発掘区の拡張には限界があり，全体像は明らかにすることが困難であった。平面形は隅丸方形を呈しており，規模は南北5.0m以上，東西2.8m以上，検出面からの深さ0.4mを測る。主柱穴は２基検出し，調査区外とあわせてほぼ正方形の配置で４基の柱穴で構成されていたと推定できる。ほぼ中央部と推定できる位置に焼土がみられ，炉の跡と考えられる。また，その焼土のすぐ南に横に隅丸長方形の炭化物が集中する土坑が設けられている。炉跡や炭穴の周囲には，ベット状遺構が確認でき，南壁際と東壁際に壁溝も検出できた。遺物は，埋土中より小型の甕の底部をはじめとして多数の土器片が検出できた。また，床面上より壺の口縁部から首にかけてが伏せた形で出土した。

ＳＨ02

調査区の北壁近く，ＳＨ01とＳＨ05の間で検出した。平面形は隅丸方形を呈しており，規模は南北3.3m，東西2.8m，検出面からの深さ0.2mを測る。炉跡や主柱穴跡は検出できなかった。遺物は，埋土中より結晶片岩製の石斧片，鉄製品と土器片が出土した。

ＳＨ03

調査区の南部の中央よりで，ＳＨ04と並んで検出した。平面形はやや楕円形に近い隅丸方形で，規模は南北3.2m，東西2.7m，検出面からの深さ0.3mを測る。炉跡や主柱穴跡は検出できなかった。遺物は，土器片が出土した。

ＳＨ04

調査区の南部の中央よりで，ＳＨ03と並んで検出した竪穴住居跡である。平面形は北壁は検出できていないが，西壁にゆがみはあるものの基本的には隅丸方形と考えられる。規模は南北3.4m以上，東西3.8m，検出面からの深さ0.2mを測る。炉跡や主柱穴跡は検出できなかった。遺物は，土器片が出土した。

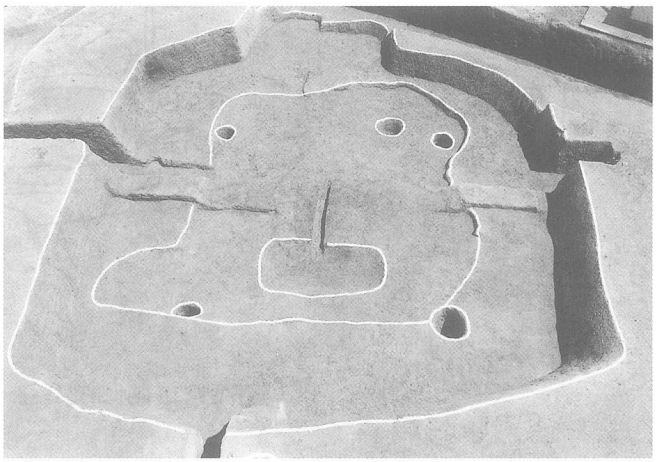


写真９　Ⅱ区 SH05 完掘全景（南より）

ＳＨ05

調査区のほぼ中央部で北壁に接するように検出した竪穴住居跡である。平面形は北に突出部を持つ隅丸方形を呈しており，規模は南北5.4m，東西5.4m，突出部幅2.2m，突出長0.8m，検出面からの深さ0.6mを測る。主柱穴は，ほぼ正方形の配置で４基の柱穴で構成されていたと推定できる。ほぼ中央部に焼土がみられ，炉の跡と考えられる。また，その焼土のすぐ南に横に長い隅丸長方形の土坑を検出し，埋土に多量の炭化物を含んでいたことから炭穴と推定できる。炉跡や炭穴の周囲には，ベット状遺構が確認できた。遺物は，埋土中より甕・壺・高坏

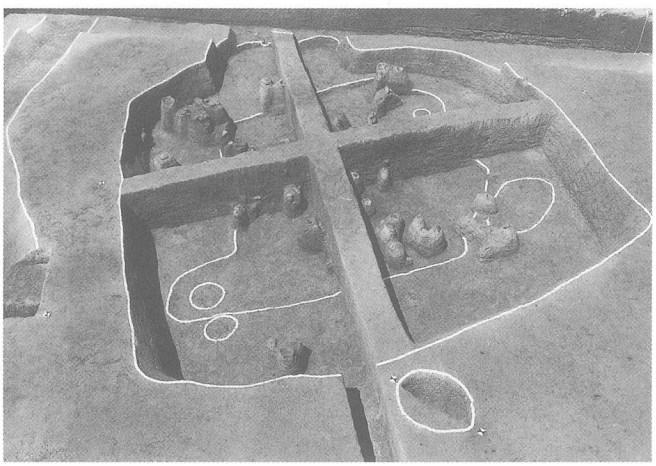
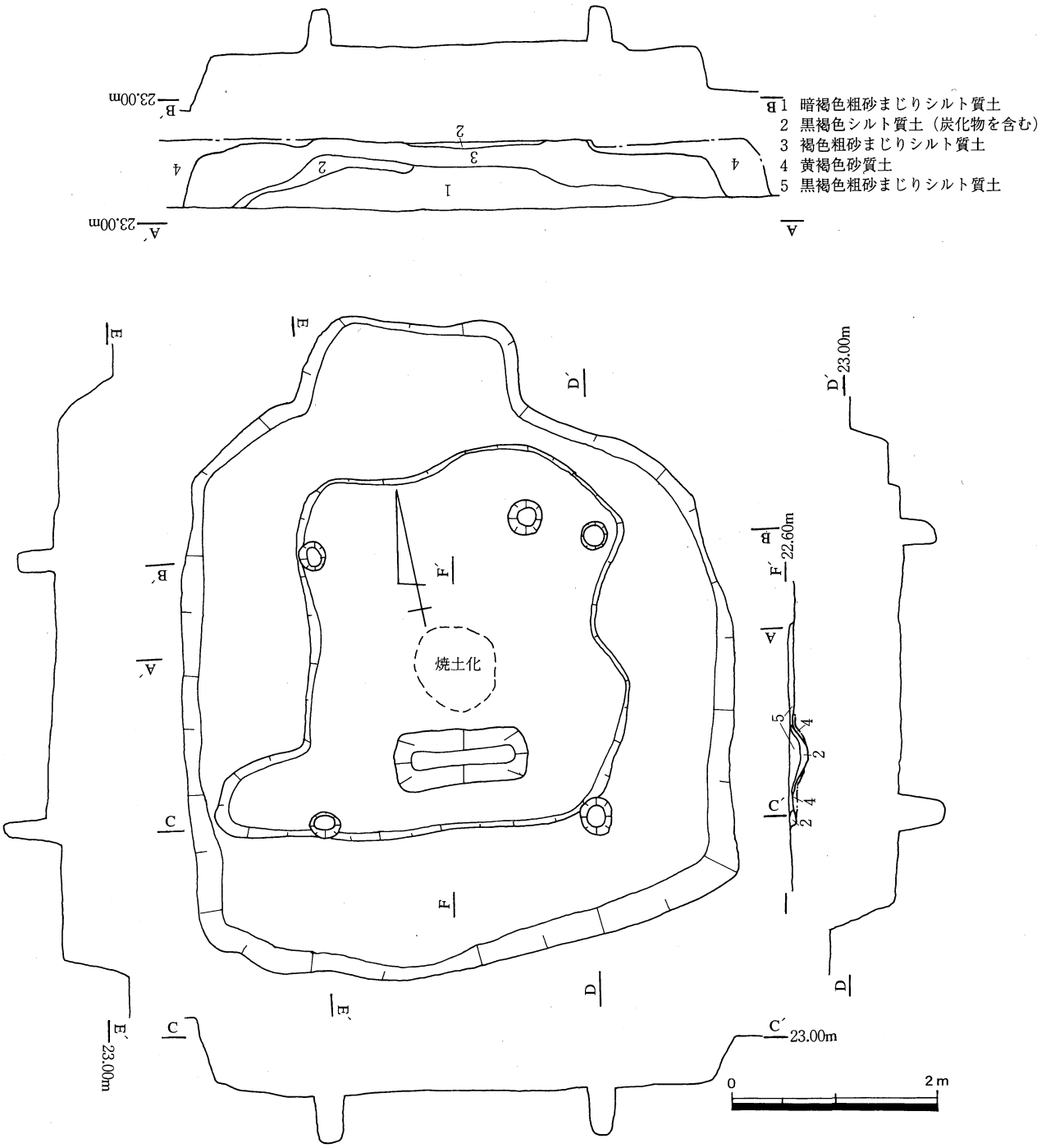


写真10　Ⅱ区 SH05 土器出土状況（南より）

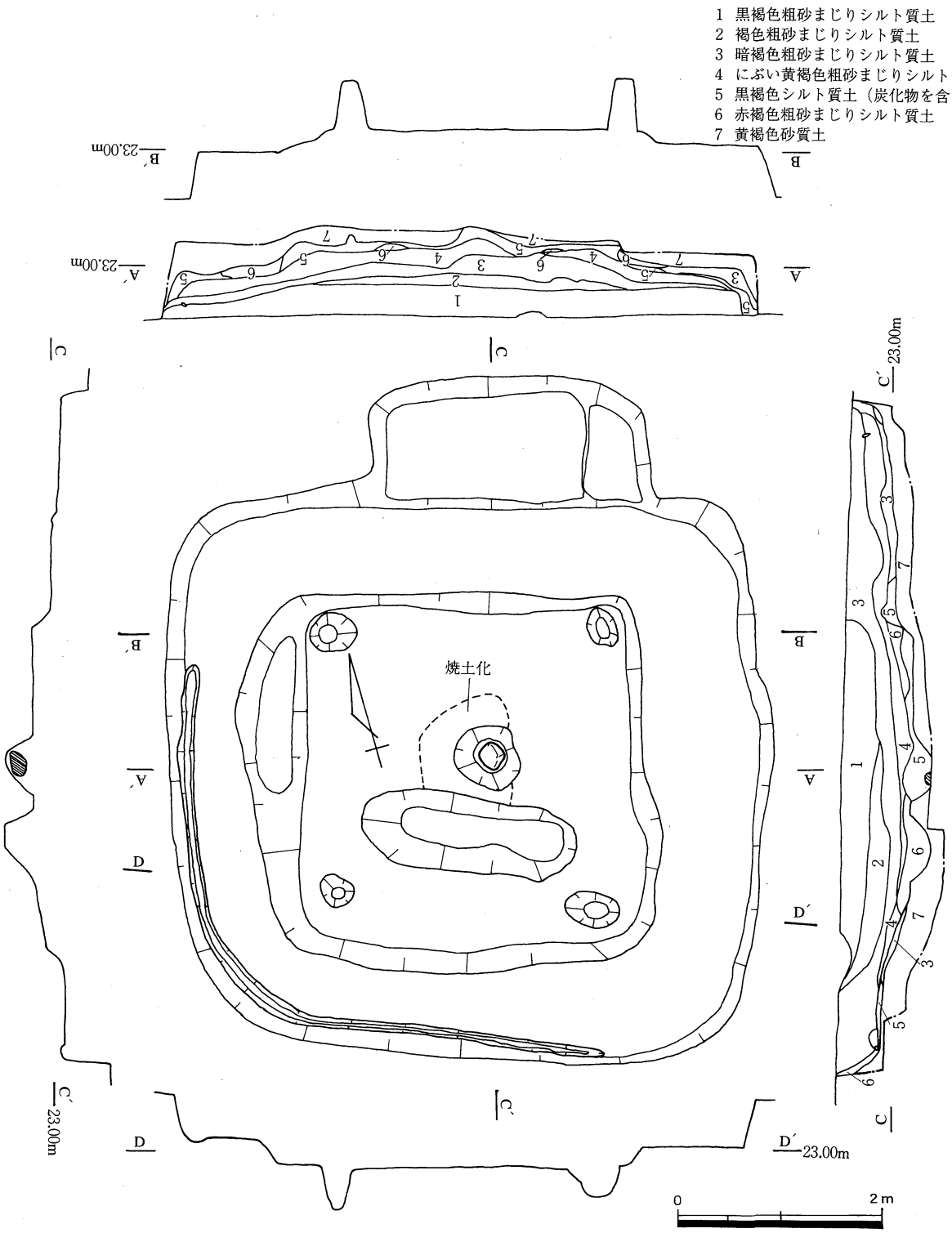
・鉢形土器など多数の土器片が出土した。



第７図　Ⅱ区　SH05　平・断面図（1／60）

ＳＨ06

調査区のほぼ中央部で西壁に接して検出した竪穴住居跡である。平面形は北に突出部を持つ隅丸方形を呈しており，規模は南北5.6m，東西5.8m，突出部幅2.8m，突出長0.6m，検出面からの深さ0.7mを測る。主柱穴は，ほぼ正方形の配置で４基の柱穴で構成されていたと推定できる。ほぼ中央部に焼土がみられ，炉の跡と考えられる。また，その焼土のすぐ南に横に長い隅丸長方形の土坑を検出し，埋土に多量の炭化物を含んでいたことから炭穴と推定できる。炉跡の下からは，石が入った円形の土坑を検出



第8図　Ⅱ区 SH06 平・断面図（1／60）

したが，その性格については不明である。炉跡や炭穴の周囲には，ベット状遺構が確認でき，南壁際から西壁際かけて壁溝も検出できた。床面直上と，主柱穴の１つから炭化した木材が出土し，消失した家屋と考えられる。遺物は，埋土中より小型丸底壺をはじめとして，甕・壺・高坏などの土器片が出土した。また，住居跡のほぼ中央部の上層部分に土器が集中した場所があり，これは住居廃絶後に人為的に投棄されたと考えられる。

ＳＨ07

調査区の西部の中央よりで検出した竪穴住居跡である。平面形は，隅丸方形を呈しており，規模は南

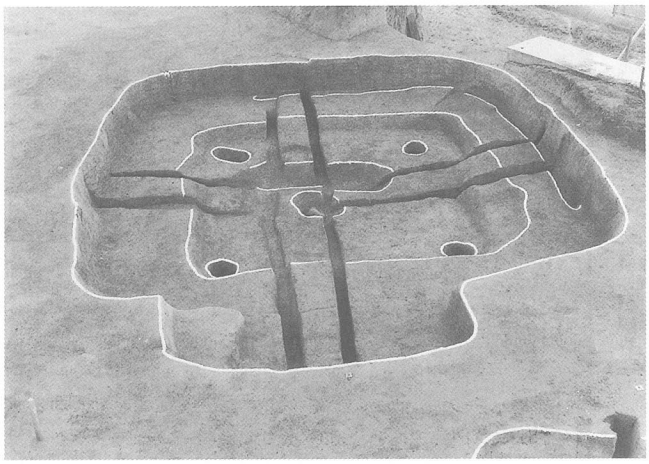


写真11　Ⅱ区　ＳＨ06 完掘全景（北より）

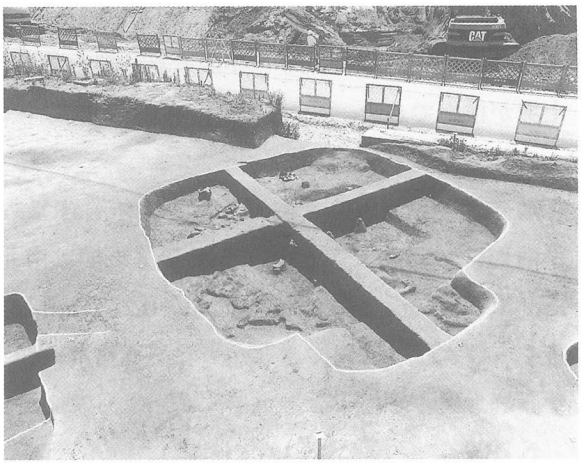


写真12　Ⅱ区　ＳＨ06 炭化材検出状況（北東より）

写真13　Ⅱ区　ＳＨ06 北東隅柱穴柱材検出状況（南より）

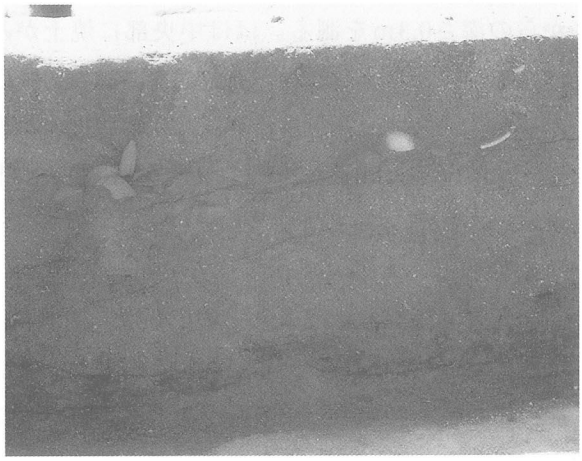


写真14　Ⅱ区　ＳＨ06 上層土器集中状況（東より）

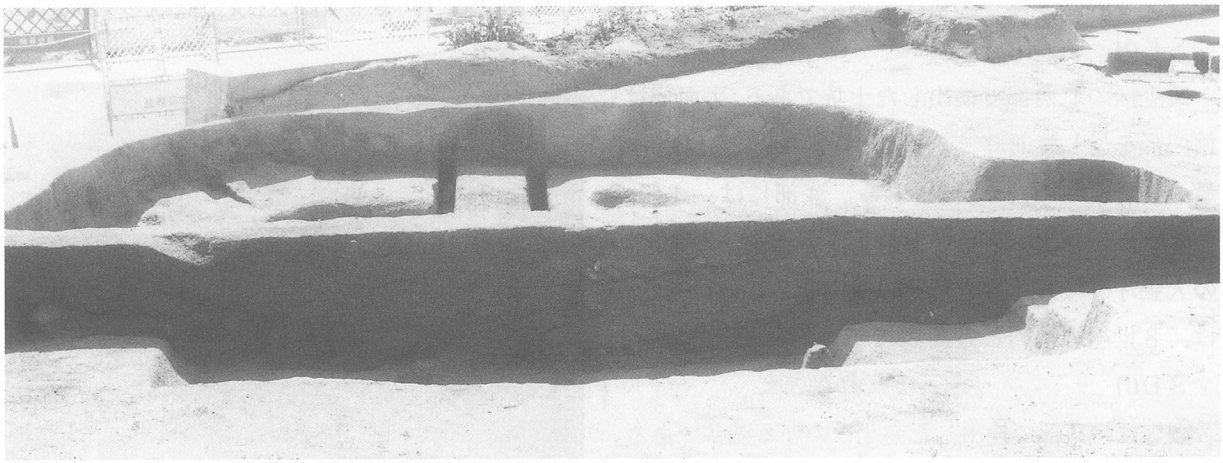


写真15　Ⅱ区　ＳＨ06　南北土層断面（東より）

北2.7m，東西2.4m，検出面からの深さ0.2mを測る。炉跡や主柱穴跡は検出できなかった。埋土中から焼土塊が検出できた。

ＳＨ08

調査区の西壁近くで検出した竪穴住居跡である。平面形は，隅丸方形を呈しており，規模は南北1.5m，東西1.8m，検出面からの深さ0.2mを測る。炉跡や主柱穴跡は検出できなかった。遺物は，埋土中から焼土塊が検出でき，土器片が出土した。

ＳＨ09

調査区のほぼ中央部で検出した竪穴住居跡である。平面形は，やや胴丸であるが基本的には隅丸方形を呈しており，規模は南北2.6m，東西2.2m，検出面からの深さ0.3mを測る。ほぼ中央部に焼土がみられ，炉の跡と考えられるが，主柱穴跡は検出できなかった。遺物は，埋土中よりほぼ完形に近い小型の甕，鉢形土器をはじめとして，土器片が多数出土した。

ＳＸ01

調査区の西部の北壁よりで検出した，南北2.3m，東西2.5mの方形の落ち込み遺構である。中央部に炭化物や焼土が集中した箇所があり，炉跡ではないかと考えられる。このことより，この遺構は竪穴住居跡のベット状遺構の内側を検出したものと推定できる。遺物は，埋土中より完形に近い小型の甕をはじめとして，多数の土器片が出土した。

ＳＫ01

調査区の北西部で検出した土坑である。平面形は，楕円形を呈しており，規模は南北1.7m，東西1.9m，最も深いところで0.7mを測る。底部には，４個の小ピットが検出できた。遺物は，埋土中より須恵器の大甕片や坏蓋片と土師器片が出土した。時期的には，８世紀のものと考えられる。

ＳＤ01

調査区の東部で検出した南北にのびる溝跡である。規模は，検出長約12.8m，幅0.9m前後，深さ0.2～0.1mであった。南は南壁から調査区外へのびていると考えられ，北は後世の耕作に伴って削平を受け

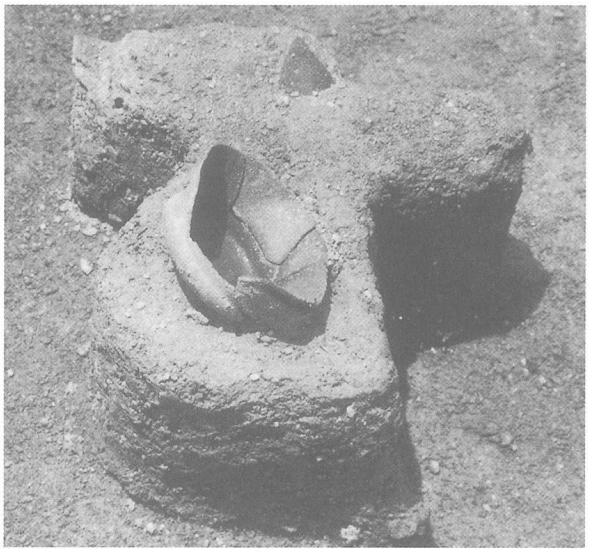


写真16　Ⅱ区 SH06 南東部 上層土器出土状況(東より)

写真17　Ⅱ区 SH06 南東部 床面直上土器出土状況(東より)

写真18　Ⅱ区 SH09 土器出土状況（南より）

ていると考えられる。遺物は，少量の土器細片が出土したのみである。遺物が少量で細片であるので時期決定は難しいが，ＳＤ03と同時期のものと考えられる。

ＳＤ02

調査区のほぼ中央で検出した南北にのびる溝跡である。規模は，検出長約10.5m，幅1.0m前後，深さ0.1m前後であった。南は南壁から調査区外へのびていると考えられ，北は後世の耕作に伴って削平を受けていると考えられる。遺物は，少量の土器細片が出土したのみである。遺物が少量で細片であるので時期決定は難しいが，ＳＤ03と同時期のものと考えられる。

ＳＤ03

調査区のほぼ中央で検出した調査区を南北に横切る溝跡である。規模は，検出長約23m，幅0.5～2.8m，深さは最も深いところで0.45mであった。南北とも調査区外へのびていると考えられる。遺物は，甕片が出土し，時期は中世から近世のものと考えられる。（樋本）

4．まとめ

竪穴住居群を検出したⅡ区を中心として概要をまとめる。

住居の形態についてみることとする。Ⅱ区の竪穴住居群はいずれも方形プランを有するが構造や規模により２種類に大別できる。大型のものは３棟検出した。一辺５～６mほどの方形を呈し，床中央に炉，その南に主軸と直行して隅丸長方形の炭化物集中土坑，四隅に主柱穴を持ち，ベッド状遺構が巡る。炉跡はＳＨ06がやや中央が窪んだ形状を呈する以外は床面が焼土化しただけである。また炭化物集中土坑の壁面には焼けた痕跡はほとんどない。また完掘できたＳＨ05，ＳＨ06については，主軸方向の北側に方形の張り出しを持つという共通性を有する。完掘できなかったＳＨ01についてもトレンチで確認した結果では，張り出しを持つと考えられる。小型のものは，平面形状から竪穴住居として調査を実施したが，床面の安定性を欠き，炉を持たず，柱穴も確認できないことから通常の居住用施設ではない。また調査区東部のＳＨ02・03・04・09については概ね方位についても大型竪穴住居と共通するが，西部のＳＨ07・08については隣接する大型竪穴住居ＳＨ06と方位がやや異なり，内部に焼土塊を含むなど若干の相違が認められることから時期差がある可能性もある。

また焼失家屋のＳＨ06では床面上に炭化した垂木等の痕跡を検出し，その上部に焼土層が堆積し，さらに間層を挟んで上部に小型の丸底壺等の土器群を比較的良好な状況で検出した。住居の構造としては，三木町鹿伏・中所遺跡で可能性が考えられている土で被覆された屋根構造を持つ可能性がある住居跡と類似した様相を呈するものである。また大型の竪穴住居はいずれも上層に比較的残存状況が良好な遺物を包含する。上層から出土した土器群については焼土層より確実に上部に位置するものであることから，住居の使用時ではなく明確に後出する時期のものである。ＳＨ01・05にも上層に土器群の集中が認められたことから，竪穴住居の廃絶時に土器群の廃棄等がなされたと考えられる。

次に住居群の構成をみる。住居跡群を検出したⅡ区は，標高34.5mのピークから北へ延びる丘陵稜線上の緩斜面に位置し，概ね共通した等高線上に並ぶ。住居群は大型竪穴住居と小型のものがセットになっており，概ね共通した主軸方向を有する。Ⅱ区内ではＳＫ01等の明確に後出する時期のものもあるが，大型の住居跡は同一時期の所産である。また掘立柱建物は検出していない。１棟の大型竪穴住居にそれぞれ１～２棟の小規模な倉庫的な建物が付属する単位が考えられ，それぞれの単位は等質的なものである。

では，対象地外への当該時期の遺構の広がりの可能性はどうであろうか。現状では手がかりは少ないが，立地条件とⅡ区・Ⅰ区の状況および県教委による試掘調査結果が直接的な資料となる。まず立地条件からすれば，対象地から北に延びる緩斜面上は対象地のⅡ区と条件上の差はさほどない。Ⅱ区竪穴住居群が本来は北へも広がりを有していた可能性は否定できない。しかし，試掘調査結果ではⅡ区の南側緩斜面上で遺物の散布が確認されている他は遺構・遺物とも存在は確認されていず，Ⅱ区北側の尾根筋緩斜面部では，畑地化による改変の結果遺構が消失したものか本来的に当該期の集落域が広がりを有していなかったものかの確証は得られなかったとのことであるが，遺物がほとんど出土していないことを評価するべきであろう。

また，牟礼町原地区の平野部は，前述したように限定された狭いものであり，大規模な集落の存在は想定し難い。前年度の県道高松志度線の原中村遺跡の調査からするとⅠ区の西側の丘陵にも，同時期の集落跡が存在することが判明していることから，今回のⅡ区の北側については集落域が北側へ大きく展開した可能性は低いのではないかと考える。今回の原中村遺跡のⅡ区竪穴住居群は周囲への眺望に恵まれた標高34.5mのピークを中心としてさほどの規模を有さず展開する，竪穴住居と倉庫的な施設がセットとなる基本単位とする等質的な単位の集合体で，平成８年度の県道原中村遺跡の集落域の広がりの一部と考えた方が良いものであろう。

いずれにしても，本地域は前期古墳が集中する高松平野と津田湾周辺域の中間に位置し，後世の南海道等が走る内陸平野部とは異なる海岸よりの地域であり，原中村遺跡での弥生時代後期末から古墳時代初頭に継続性を有しない短期的な集落の出現という事実は，香川県下の古墳時代前期を理解する上で貴重な資料を提供しうるものである。今後，出土土器の系譜的な組成等により，周辺地域との関連度を明らかにしていく必要があろう。（藤好）

参考文献

「原中村遺跡」「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成８年度」１９９７．３
香川県教育委員会，財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
「鹿伏・中所遺跡」「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度」１９９５．３
香川県教育委員会，財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

報告書抄録

ふりがな	けんりついりょうたんきだいがくけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう　はらなかむらいせき
書名	県立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　原中村遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤好　史郎　・　樋本　清輝　・　香西　　亮　・　糸山　　晋
編集機関名	財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒762－0024　香川県坂出市府中町南谷5001－4　☎0877－48－2191
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター
発行年月日	１９９８年３月３１日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数
20頁	4頁	14頁	0	0	18	8

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村　遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はらなかむらいせき 原中村遺跡	かがわけんきたぐんむれちょうはら 香川県木田郡牟礼町原	37342	34° 19′ 7″	134° 9′ 43″	19970401 ～ 19970630	2000㎡	県立医療短期大学 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原中村遺跡	集落	弥生時代後期	自然河川跡 竪穴住居跡 柱穴跡	弥生土器	
		奈良時代	土坑	須恵器 土師器	
		鎌倉時代	溝状遺構	土師器	

県立医療短期大学建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報
原　中　村　遺　跡

平　成　9　年　度
平　成　1　0　年　3　月

編　集　財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

発　行　香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

印　刷　タナカ印刷株式会社